

の國なれば。いつまでも君が代に。住吉にまづ行きて。あれにて待ち申さんと。夕波の汀なる。海人の小舟に打乗りて。追風に任せつゝ。沖の方に出でにけりや。沖の方に出でにけり。

略式にしては之までを省き次の待謠からにする事もあり。

ワキ歌「高砂や。此浦舟に帆をあげて。〜。月もろともに出汐の。波の淡路の島かげや。遠く鳴尾の沖過ぎて。はや住の江に着きにけり。〜。

以上はシテ未だ立ちて舞はず。

此待謠すみて出端あり。これより立ちて舞ふ事もあり。

又は神舞より立つもあり。

後シテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いくよ経ぬらん。むつましと君は知らずや瑞垣の。久しき代々の神かぐら。夜の鼓の拍子を揃へて。すゞしめ給へ宮つ子たち。地「西の海。あをきむ原の波間より。シテ「あらはれいでし神松の。春なれや残んの雪の浅香湯。地「玉藻刈るなる岸陰の。シテ「松根によつて腰をすれば。地「千年のみどり手にみてり。シテ「梅花を折つて頭にさせば。地「二月の雪衣に落つ。

こゝに神舞あり。出端より神舞の終るまで太鼓を用ふ。

地「有難の影向や。〜。月住吉の神遊。御影を拜むあらたさよ。

シテ「げにさまゝの舞姫の。聲も澄むなり住の江の。松影もうつるなる。青海波とは是やらん。地「神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。シテ「それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳の。シテ「小忌衣。同「さすかひなには悪魔を拂ひ。收むる手には壽福をいだし。千秋樂は民を撫で。萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風。さつゝの聲ぞ楽しむ。

〇八 島

シテ「智者は惑はず。同「勇者は恐れずの。やたけ心の梓弓。かたきには取りつたへじと。

この邊よりシテ立ちて舞ふ。

惜しむは名のため惜しまぬは。一命なれば。身を捨てゝこそ後記にも。佳名を留むべき。弓筆のあとたるべけれ。シテ「又修羅道のときの聲。地「矢さけびの音震動せり。

こゝに翔あり。

シテ詞「今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登守教經とや。あらもの〜しや手並は知りぬ。思ひぞ出づる檀

の浦の。同「その舟軍いまはゝや。く。閻浮にかへる生死の。海山一同に震動して。舟よりはときの聲。シテ「陸には波の楫。地「月に光るは。シテ「劍の光。地「潮にうつるは。シテ「兜の星の影。同「水や空々ゆくも又雲の波の。打ち合ひさしちかふる舟軍の駈引。浮き沈むとせし程に。春の夜の波より明けて。敵と見えしは群れぬる鷗。ときの聲と聞えしは。浦風なりけり高松の。浦風なりけり高松の。朝嵐とぞなりにける。

○羽衣

サシ「然るに月宮殿の有様。玉斧の修理とこしなへにして。同「白衣黒衣の天人の。数を三五に分つて。一月夜々の天乙女。奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天乙女。同「月の桂の身を分けて。假に東の駿河舞。世に傳へたる曲とかや。

是よりシテ立ち舞ふ。

クセ「春がすみ。棚引きにけり久方の。月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは春のしるしかや。おもしるや天ならで。こゝも妙なり天つ風。雲の通路ふきとちよ。乙女の姿しばしとゞまりて。此松原の春のいろ三保が崎。月清見がた富士の雪。いづれや春の曙。たぐひ波も松風も。のどかなる浦の有様。そ

の上天地は。何を隔てん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は。天の羽衣まれに來て。同「なづとも盡きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の。笙ちやくきんぐご。孤雲の外に満ちく。落日のくれなゐは。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。拂ふ嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ妙なる。

是より太鼓入る。

シテ「南無歸命月天子。本地大勢至。同「東遊の舞の曲。

こゝに序の舞あり。

シテ「あるひは。天つみそらの緑の衣。地「又は春立つ霞の衣。シテ「色香も妙なり乙女の裳裾。地「左右左右さつゝの。花をかざしの天の羽袖。なびくもかへすも舞の袖。

こゝに能にては破の舞あれども囃子にては省くを常とす。

あづまあそびの數々に。く。その名も月の色人は。三五夜中の空に又。満願真如の影となり。御願圓満國土成就。七寶充滿の寶を降らし。國土にこれを施し給ふ。さるほどに時うつて。天の羽衣浦風に。だなびきたなびく。三保の松原浮島が雲の。足高山や富士の高嶺。かすかになりて天つみそらの。霞に

まぎれて失せにけり。

○紅葉狩

サシ「林間に酒をあたくめて紅葉を焼くとかや。同「げに面白や處から。巖の上の苔筵。片敷く袖は紅葉衣の。紅葉深き顔ばせの。ワキ「此世の人とも思はれず。同「胸うちさわぐばかりなり。クセ「さなきだに人心亂るゝ節は竹の葉の。露ばかりだに受けじとは。思ひしかども盃に。向へばはる心かな。

是よりシテ立ちて舞ふ。

されば佛も戒めの。道はさまざま多けれど。殊に飲酒を破りなば。邪淫妄語も諸共に。亂心の花かづら。かゝる姿は又世にも。たぐひ嵐の山櫻。よその見る目もいかならん。シテ「よしや思へば是とても。地「前世の契あさからぬ。深き情の色みえて。かゝる折しも道のべの。草葉の露のかごとをも。掛けてぞ頼む行末を。ちぎるもはかな打ちつけに。人の心も白雲の。立ちやすらへる心かな。かくて時刻も移りゆく。雲に嵐の聲すなり。散るか正木の葛城の。神のちぎりの夜かけて。月の盃さすほども。雪をめぐらす袂かな。絶えず紅葉。

こゝにて中の舞あり。

シテ「絶えず紅葉青苔の地。またこれ涼風くれゆく空に。雨うちそぐ夜嵐の。物すさまじき山かげに。月まつほどのうたゝれに。夢ばしさまし給ふなよ。く。

第三篇 能狂言

狂言は、能と能との間に演ずるものではあるが、其歴史をさかのぼつてみればむしろ能よりも古いのである。(拙著能樂全史) 狂言は、單獨に、能と能との間に於いて演ずるが、其他アイ狂言と云つて一番の能の中に於いても大切なつとめをしてゐるのである。現在では能五番ならば狂言三番、能三番ならば狂言二番と云ふのが原則となつてゐる。狂言は狂言で獨立してゐてこれ又専門なのである。

一 狂言の流儀

狂言には三流ある。

大藏流

狂言文作者の玄惠法印以來の直傳は大藏流である。云ふ迄もなく、狂言文は足利時代と云ふ

文學畑の特産物で、我が國に於ける地の文拔きの嚆矢である。

この歴史的に古い大藏流も、今では家元が絶えて、山本東次郎氏が家元をあげかつてゐる。

和泉流

この流儀には分派が頗る多い。宗家山脇四郎歿後家元がない。余は山脇四郎君と親交あり、ともに、和泉流の大改革を劃したことがあるので、感慨最も深いのである。和泉流は大藏流の分れであり、舊幕の頃には尾州藩に仕へてゐた。現在和泉流では野村萬造一派が時めいてゐる。

鷺流

この流儀は現在はないのである。然し、大藏流について古い流儀である。この他昔は脇本流があつたのであるが、トクの昔にすたれてしまつた。この流儀の流れをくんだのが和泉流である。

狂言の番數は、大略二百七番であるが、現在舞臺でつとめてゐるものは極めて少ない。

二 狂言の番組

能を演ずるに當つて、神、男、女、狂、鬼の順序があるやうに、狂言にも、相當の順序があるのである。

大體に於いて狂言では、最初に出すものを脇狂言と云ひ、其次ぎのを二番狂言と云ひ、其あとのを雜狂言と云ふのである。これには夫々特徴がある。

脇狂言——概して目出度いもので祝言の心持を表はす。

二番目狂言——大名物の如きを主とする。

雜狂言——種々な題材のものを總括する。

脇狂言(約三十二番ある)

末廣がり、 三本柱、 夷大黒、 福の神、 二人袴等。

二番目狂言(十六番ある)

文相撲、 蚊相撲、 入間川、 今參、 栗田口等。

雜狂言(約百二十番)

二千石、 文藏、 竹生島參、 武惡、 止動方角、 その他。

狂言不審紙と云ふ書には、狂言を春夏秋冬の四季に區別してある。

左に記する所は大藏流山本東太郎氏の談である。

脇狂言と云ふのは狂言中の首位に置かるべきものを指して云ふのである。何故脇狂言と云

ふのであるか、それは脇能と云ふ語の意義と同じ様に種々の説があつて、今に確と分明して居

ない。

流儀で脇狂言と稱するものは左の二十四番である。

- | | | | | | | | |
|-------|---|---|-----|-----|-----|-----|------|
| 末廣がり | 目 | 近 | 麻 | 生 | 三本柱 | 福の神 | 大黒連歌 |
| 惠比須大黒 | 松 | 脂 | 煎 | 物 | 寶の槌 | 隠れ笠 | 鎧 |
| 鍋八撥 | 牛 | 馬 | 三人夫 | 筑紫奥 | 餅 | 酒 | 鴈雁金 |

昆布柿 唐相撲 佐渡狐 松 樫 毘沙門 狐の神

右二十四番の狂言中一つとして目出度くないものは無い。これ實に脇狂言の特色とも稱すべきものである。それで名乗なども他の狂言とは違つて目出度く、品好く、サラリと行かなければならぬ。舞ひにしてもその通りで滞り無きを旨とするのである。だからお正月とか、祝ひとか、舞臺披とか云ふ節の狂言は必ずこの脇狂言のうちから撰ぶことになつてゐるのである。脇狂言は御前掛りとなると舞臺へ出て先づ禮をしなければならぬ。即ち名乗る時、常のやうに立つたまゝで無く、膝を突き、両手を突いて名乗るのである。この禮は縦し後に他流があつても、その日中の狂言全體を代表して爲る禮なのである。勿論狂言のことであるから、御前で寐することもあらうし、安座をすることもあらうし、又騒ぐこともあらう、それ等はお許しを願ふと云ふのがこの禮の趣意なのである。

「翁」附の節には同じ脇狂言であつても、四拍子の會釋のあるものを出すのが法である。即ち、「末廣がり」、「目近」、「三本の柱」、「麻生」、其外澤山あるが、當今は之が兎角略され勝ちにな

つてゐる。又「翁」附の節は、常に長上下を着けるものは素袍、折烏帽子と變る。但し之は悉くが然うだと云ふのでは無いが、本脇狂言ならば悉くと云つてよい。

鞞の狂言を脇狂言にすることもある。そして若し「翁」附であつたら舅の長上下は矢張り素袍折烏帽子となる。

一大名

流儀の狂言の中で大名曲と稱するものを擧げると左の二十二番である。

| | | | | | |
|-----|------|-----|-----|------|-----|
| 入間川 | 今參 | 栗田口 | 文相撲 | 鼻取相撲 | 蚊相撲 |
| 秀句傘 | 人馬 | 鞞猿 | 禁野 | 雁磔 | 雁盜人 |
| 墨塗 | 鬼瓦 | 萩大名 | 文藏 | 二千石 | 富士松 |
| 茫々頭 | 二人大名 | 昆布賣 | 武惡 | | |

扱一口に大名と云つても、そのうちにはいろ／＼な種類がある。訴訟が叶つて國へ歸る大名

もあれば、狩に行く大名もあり、人を抱へる大名もあれば、相撲をとる大名もある。恠う云ふ風ふうにその種類しゆるいを異ことにするに従したがつて、之を演えんずる心持こころもちも亦異またことなつて来る。先づ訴訟そしやうが叶かなつた大名なら喜よろこばしいと云ふ心持こころもちが無なければならない。又狩かりに行く大名なら勇いさんだ心持こころもちが必要ひつやうであり、人を抱かへる大名なら何處どことなく勿體もつたい振ふつたと云ふ心持こころもちを有もたなければならぬ。それから裸體はだかになる大名は、相撲すまふを取る大名と其外そのほかに「入間川いりまがわ」の如ごとき、「二人大名ふにんだいみやう」の如ごとき、さては「靱猿うづはざる」の如ごときが即ち夫れである。この種しゆの大名はその装束しょうそくの下へ必ず白練しろねりと下袴しもはかまとを着き込んでゐる。

かやうに心持こころもちは大名の種類しゆるいに依よつて様々さまざまであるが大體だいたいから云ふと、見識けんしきを有もつて演えんずることを忘れてはならない。見識けんしきと云つても無闇むやみに横柄わうへいな顔かほをするのでも無なければ、又、矢鱈やたらに威張ゐばり散らすのでも無ない。要えは大名らしくするのである。

二十二番ふたじふにばんの大名曲だいまやうもののうちでその代表的だいへうてき狂言きやうげんとも見るべきものは「今參いままゐり」である。これを演やり科こなすことが出来れば、他の大名曲だいまやうものは自ら科こなし得えらるゝと云ふ程ほどになつてゐる。

大名曲だいまやうものの中でも難物なんぶつは「秀句傘しゆくからかさ」、この狂言きやうげんは初めから了しまひまで演やり難にくい。藝ぎも餘程よほど上達じやうたつし

た上でなければ勤つとまらぬ。

「武悪ぶあく」は止め狂言きやうげんにも用もちひる。若し年としが若わかければ、武悪ぶあくをシテにし、年としを取とつてゐれば主しゆをシテとする。「靱猿うづはざる」も年輩ねんぱいに依よつては猿引さるひきをシテとする。

由來ゆらい狂言きやうげんはその源みなもとを神前しんぜんの舞樂ぶがくに發はつしたものである事は動うごかす可べらざる説せつである。

二 聲

當流たうりうで聲こゑを主題しゆだいとした狂言きやうげんは、

- | | | | | | |
|-----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 夷毘沙門 <small>えいびしやもん</small> | 庖丁聲 <small>はうちうむこ</small> | 音曲聲 <small>おんぎよくむこ</small> | 岡大夫 <small>おかだいはう</small> | 水掛聲 <small>みづかけむこ</small> | 引鋪聲 <small>ひききむこ</small> |
| 鶏聲 <small>にほとりむこ</small> | 八幡前 <small>やはたのまへ</small> | 船渡聲 <small>ふねわたしむこ</small> | 二人袴 <small>ふにんはかま</small> | 賽の目 <small>さいのめ</small> | 貫聲 <small>もろひむこ</small> |

右十二番みぎじふにばんであるが、この外そのほかに獅子聲ししむこと云ふのがある。これは後あとでお話わしする。

聲こゑの狂言きやうげんの大半たいはんは、吉日きちにちを撰えらんで聲こゑ入いりをすること、舅しやうとがそれを待まち設まけてゐて、迎むかへる。それから種々しゆくの事柄ことがらが起おつて、筋すぢが運うんで行いくと云ふのが、普通ふつうの形式けいしきである。

それでその聲にもいろ／＼なのがある。夫れを雜つと別けて見ると、左の如きものとなる。

神に關するもの、これは夷毘沙門一番である。

誑れる聲、これは庖丁聲、鶏聲、音曲聲の如きものである。

失敗する聲、これは歌などで人に敗ける聲で、例へば八幡前が夫れである。尤も歌ばかりには限らない。

成功する聲、賽の目は即ち夫れである。

喧嘩をする聲、水掛聲の如きは即ち夫れである。

次ぎに是れ等の聲の狂言の中には、舞働きや、舞や又語りのあるものがある、夷毘沙門の如きは、舞働きもあれば語りもあり、音曲聲、引鋪聲、船渡聲、鶏聲には何れも舞があるのである。

それから、夷毘沙門は装束がなか／＼込んでゐる。先づシテ即ち夷は、面が夷の面、大臣烏帽子（上頭掛）を冠り、着附が縫箔、絹縷の水衣、下袴、胴箔の腰帶、扇、釣棹に鯛、次ぎにアド即ち毘沙門の方は、面が毘沙門の面、透冠を冠り、着附が色入の厚板、側次、狂言袴（ク

クル）腰帶、扇、鉾を持つ。

この外、賽の目のアドは乙の面をかける。

それで、かやうに聲を主題とした狂言は、その聲の種類に依つて、成功する聲は成功する聲のやうに、又失敗する聲は失敗する聲のやうに、何れもその曲柄に依り、之れを演じ別けなければならぬ。聲と云へば何の聲でも同じやうな心持でゐたのでは、一曲の趣味も精神も現はれない。

扱て、前に一寸擧げて置いた獅子聲と云ふ狂言は、藤堂家で作られたもので、當流の外にはない。これは大習になつてゐる。

この狂言は矢張り聲入りを仕組んだものであるが、聲入りをして聲は獅子舞を舞ひ、舅もトモも亦舞ひを舞ふと云ふ結構の壯大なものである。而してこの會釋は四拍子とも正面を向き本調子で囃すのであるから、餘程心得がなければ勤まらない。聲は一旦中入をして、装束を替へて出て來て獅子を舞ふのである。その装束は、紅段敷斗目、厚板坪折、素袍の下で、赤頭を冠

り、それに金の扇きんあふぎを付ける。但しこれは付けぬこともある。そして獅子の頭あたまの振り方はなかなか壯さかんなものである。

この狂言には昔將軍家から拜領はいりやうした謠うたを謠うたふ。その謠うたひの文句もんくは左の如くである。

猶行末なほゆくすゑを祝いはふなる。扇あふぎの地紙折ぢがみをりりくは。契ちぎりを込こむる込骨こめぼねの。紋もんこそ要かなめなりけれ。

英照皇太后えいせうこうたいごうさま様の時分に、父ちちの東あづまが、先代の藤堂とうだうさま様のお勸すすめで御覽ごらんに入いれた事がある。その後、明治天皇の御前に於いても、之を勤めて至榮しえいを擔になふたのである。この外に父はまだ三回程つと勤つとめたやうに思つてゐる。

兎うさぎに角しよ、獅子しよ掣むじと云ふ狂言は大藏流おほくらりうに取つては由緒ゆいしよもあり、又頗る光輝くわうきある狂言なのである。

三 狂言の格式

狂言きやうげんは稽古けいこする場合ばあひには能のうよりもむづかしいのである。云ふ迄もなく、師資相承ししあうじやうじやうの上には、其習そのまらひ物に輕重けいちゆうの差別さべつがある。たとへば和泉流わいせんりゆうで云へば、入門にふもん後稽古けいこするもの、小習せうじゆ、中習ちゆうじゆ、

一番習いちばんじゆ、大習おほまらひと云ふ工合ぐあひに、順序じゆんじよがあるのである。大習おほまらひの後に一子相傳物しきさうてんもの、釣狐真ノ形つりぎつねのなまがた、花子はなこ真ノ形まのなまがた、狸たぬきの腹鼓はらつづみ、及び風流ふうりゆうの如きものがある。又別に重き習しゆひ物としてゐる特稱とくせうもある。即ち和泉流わいせんりゆうについて云へば、

- 三主物——武惡、 止動方角、 くらげ罪人
- 三番狂言——末廣、 麻生、 張章魚、 目近、 三本柱
- 三大名——靱狐うづはね、 入間川、 栗田口あはだぐち

四 狂言の役割

狂言きやうげんを演えんずる役者やくしやの役名やくめいにもいろくある。

シテ(又オモとも云ふ)

之は能のうの場合と同じく、主に働はたらく役であつて、仕手しての義である。

アド

シテの相手になる役がアドで、能で云へばワキである。狂言でも能ガ、リの物にはワキと云ふことがある。アドが大勢になると、一のアド、二のアド、三のアドと云ふ。總稱して立衆と云ひ、其頭を立頭と云ふこともある。

シテ、アドなどの役名以外に最も多い名前は太郎冠者と主である。冠者は元服した若人と云ふ意味である。後世は召使の意味となつて、太郎冠者、次郎冠者、三郎冠者など、云はれるに至つた。曲によつて太郎冠者がシテの時には、主はアドである。(通例この場合にはアドと云はず「主」と云ふてゐる)。

この他役名によらないで、役割の上から、大名だの、目代だの、山伏だのと云ふ名も用ひる。何れにせよ、一曲の中にはシテ役とアド役があるのである。

五 狂言の装束其他

狂言の装束は能に比すれば、其種類が少ない。たゞ一風かはつてゐるのは、女である。普通

の女は直面(面をつけなくて)、頭にびなん帽子(桂帽子)と云つて包布をまいて顔の兩方へたらしてゐる。狂言でも曲に依つては面をつけるが、其種類は極めて少ないのである。十七八種しかない。作り物小道具の類も、能に比較すると極めて簡單であり且其種類も少ない。

六 間狂言

能の中入の時、狂言師が出て来て物語りをする。これが「間」である。これは演劇で云ふ所の間劇と同意義である。狂言師は、

- 一、一番の狂言を演ずる。
- 二、間のカタリをする。
- 三、場合に依つてシテ及びワキのアシラヒをする。

と云つた工合に、仕事の種類が多いのである。

間狂言には、語間と立間と云ふ別がある。語間は名所の所の人、立間は官人、末社の神、物

の精である。又シテの出に先きだつて口開をする場合もある。
又中入の間語を特に他のものにかへることもある。八島の那須の語りなど其一例である。

謠曲と能樂通 終

版初日 十月六年五和昭……………刷 印
版初日八十月六年五和昭……………行 發

| | |
|-------------|---|
| 書名…………… | 謠曲と能樂通 |
| 定價…………… | 金七十錢 |
| 著作者…………… | 横井春野 |
| 發行兼印刷者…………… | 東京市神田區通神保町一番地 四六書院 代表者 荒井左吉 |
| 印刷所…………… | 東京市外蒲田 三省堂蒲田工場 |
| 發賣所…………… | 東京市神田區通神保町一番地 株式会社 三省堂 (振替東京三一五五五番) |
| 發賣所…………… | 大阪市南區順慶町通一ノ四一 株式会社 三省堂大阪支店 (振替大阪八一三〇〇番) |

製 復 許 不

242

行發院書六四

各代近 四美裝 六寫眞 判二〇〇頁 內多畫數 外錢八

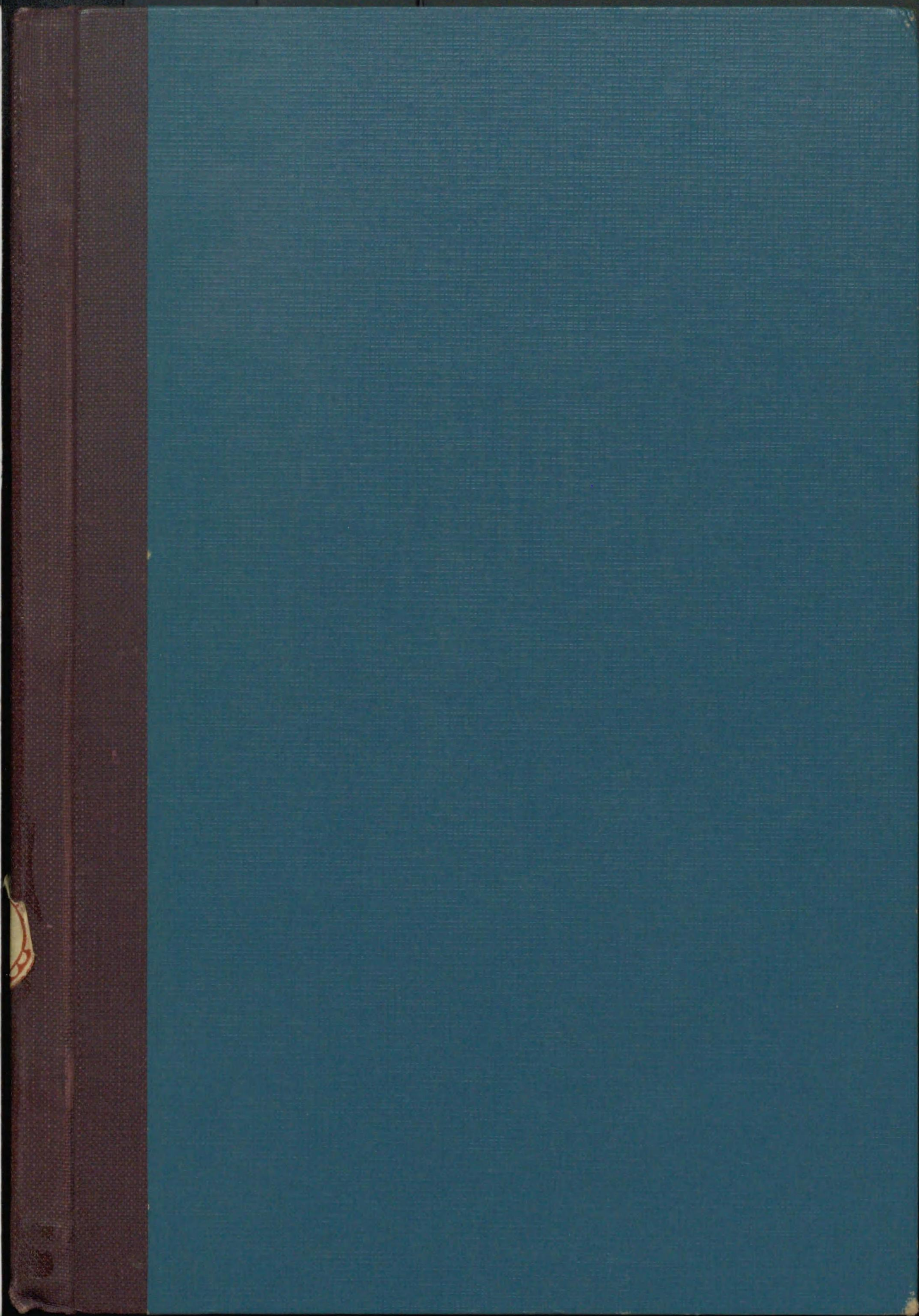
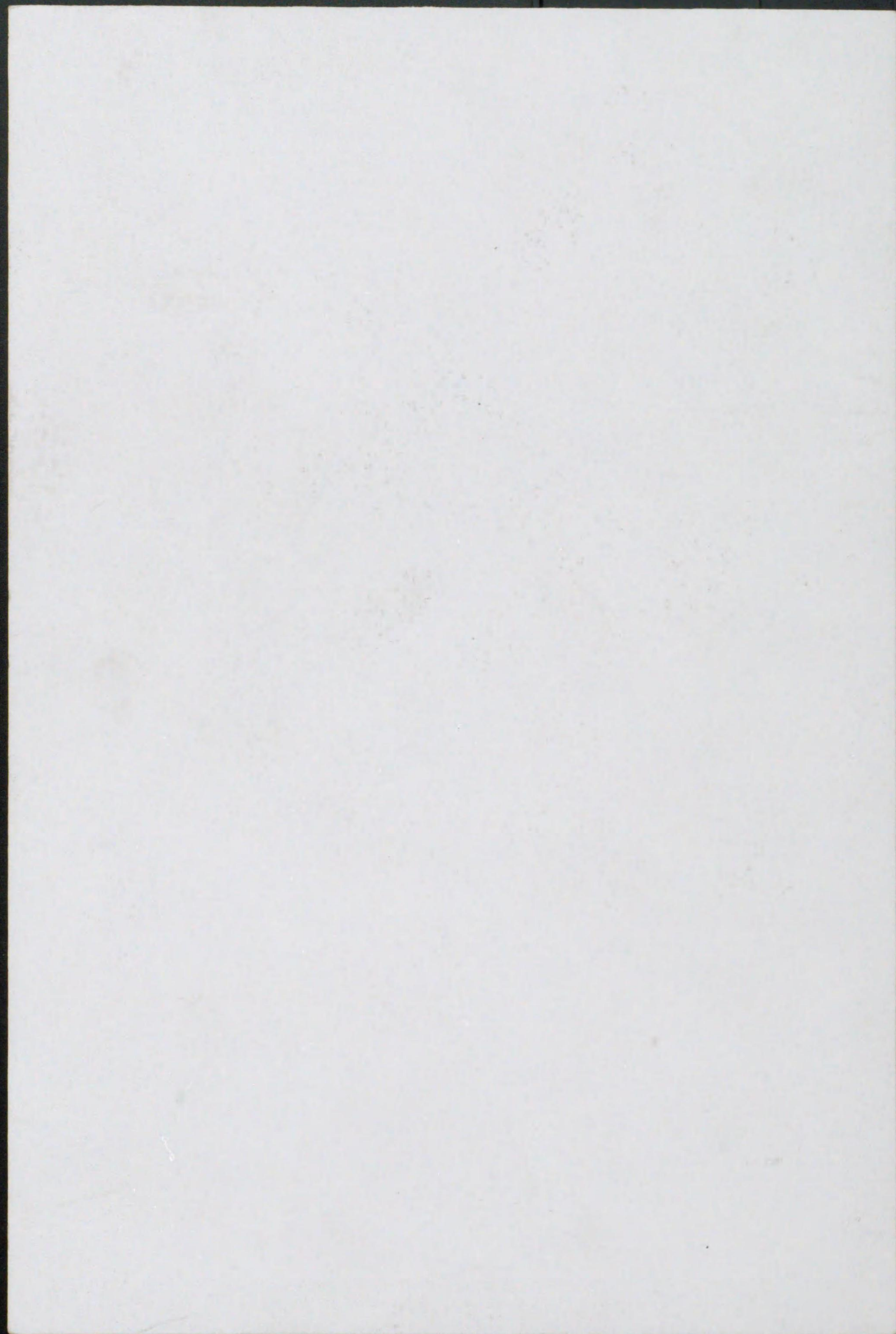
定價各十七錢

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|--------|-----|---------|------|---------|-----|--------|------|--------------|-------|---------|------|---------|------|------------|------|---------|------|---------|--------|---------|----------|--------|---------|--------|
| 果物 | 通齋藤義政著 | 歌舞伎 | 通伊原青々園著 | 新劇 | 通水木京太著 | 古書 | 通河原萬吉著 | 煙草 | 通石川欣一著 | カフエー | 通酒井眞人著 | 映畫 | 通立花高四郎著 | スポーツ | 通廣瀬謙三著 | 銀座 | 通小野田葵蔭著 | 天ぷら | 通野村雄次郎著 | 西洋音樂 | 通小松清著 | 日本俗曲 | 通中内蝶二著 | 鰻 | 通入江幹藏著 |
| ダンス | 通坪内士行著 | 洋裝 | 通マスケイト著 | 日本料理 | 通樂滿齋太郎著 | をどり | 通小寺融吉著 | 西洋料理 | 通秋山德藏著 | 支那料理 | 通後藤朝太郎著 | 支那旅行 | 通後藤朝太郎著 | 野球 | 通橋戸頑鐵著 | 日本音樂 | 通田邊尙雄著 | 日本畫 | 通橫川三異著 | トーキ | 通立花高四郎著 | 酒 | 通鈴木氏享著 | 古今いかもの通 | 通河原萬吉著 |
| 國技角力 | 通三木雙花著 | 西洋畫 | 通中川紀元著 | 洋服 | 通上原浦太郎著 | 菓子 | 通三好右京著 | 菓 | 通中山恒三郎關九山雄二著 | 謡曲と能樂 | 通橫井春野著 | 釣魚 | 通野崎小蟹著 | 蕎麥 | 通やぶ忠村瀬忠太郎著 | 藝妓 | 通花園歌子著 | 探偵小説 | 通松本泰著 | 古今年中行事 | 通相馬敬止著 | 以下續々刊行豫定 | | | |

—(賣發堂省三)—

602

1

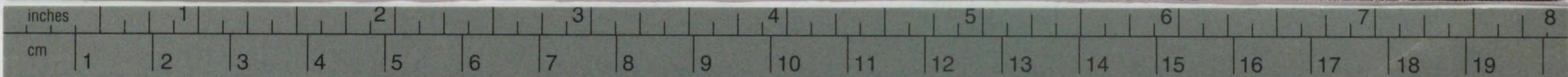


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

